

学校教育におけるコミュニケーション教育の比較研究

各教科の授業における言語行為を言語教育の観点から意味づける

千葉大学教育学部 寺井 正憲

学校における教育的営為を見渡したとき、言語教育の契機となる場面や状況を多数認めることができる。国語科の授業はもちろんそうだが、学校内の言語環境としてとらえられる「教師のこぼれ話、教師の板書、手づくりの教材、図書の整備、校内放送、学校（学年・学級）新聞、集会や行事の司会進行、校舎内外の掲示」（広野昭甫「言語環境づくり」田近洵一・井上尚美編『国語教育指導用語辞典』教育出版、1984年10月、232ページ）等も国語教育を行う契機と認められる。

しかし、国語科以外の教科の授業は、従来言語教育の契機としてはあまり考えられてきていない。例えば、小学校の社会科や算数科や理科では、子どもたちが自分たちの考えを明確にし洗練していく過程で、話し合いの活動を行う場面が多く認められる。確かに話題こそ当該教科のものであるが、国語教育から見たとき、そこには話す・聞くという言語活動、内言の活動が営まれている。また、先の教科に関わらず、一時間の授業における自分の体験や考え、意見、あるいは感想をノートに書くことも、どの教科でも行われる学習活動である。けれども、これまでの国語教育研究では、それらの話す・聞く・書くという活動に注意を払ってきこなかった。

ここには、二つの反省点を認めることができる。

第一に、本来技能教科である国語科で育成された言語能力は、他教科における学習にも資するべきものである。しかし、他教科における言語的な営みに目を向けてこなかったということは、国語科で育成された言語能力が他教科で本当に役立っているのかどうか、あるいは他教科で役立つ言語能力を本当に育成しているのか、という点について検証してきていないことを物語るものである。

第二に、他教科の授業での話し合いや書く活動においても子どもたちの言語能力は育成されているだろう点を取り上げてきていないことである。話したり書いたりする力は、実際に話す

こと書くことなくしては育成されない。逆にいえば、話すこと書くことが行われている場では、質の差こそあれ、それらの言語能力は育成されていると考えてよいだろう。実際、算数科の発見ノートで、子どもたちの文章表現力が洗練されていく実践を認めることができる。（拙稿「他教科の学習における言語の営みを言語教育としてとらえる」日本国語教育学会編『月刊国語教育研究』第270号、1994年10月、54ページ）

したがって、国語教育の新たな局面を拓き、国語科の枠組みをとらえ直すことが要請される時、上記の二つの反省点に関して、他教科の授業における言語行為を国語教育の観点から意味づけることは、意義のある重要な課題と考えられる。

そして、この問題は単に国語教育からの発想だけではなく、他教科においても探求されるべき課題なのである。例えば、平林一榮は「算数・数学独特の術語や言い回しがあり、それに慣れることも算数学習の重要な部分なのである。しかし、この面での内容は、まだ十分に把握されても、整理されてもいない。……いわゆる術語は丁寧に指導されるが、例えば問題の解決過程を述べたり、問題として形式化（言葉で明確に述べること）したりすることは、あまりないであろう。」（「算数科で育成すべき固有の表現力とは何か 表記の体系としての数学観にたって」『教育科学算数教育』第468号、1995年3月、9ページ）と述べた上で、「国語科とともに表現訓練の場として、算数科を整備しなおすことも考えられるであろう。」（10ページ）としている。

そこで、本研究では、先の課題意識に基づいて、社会科や算数科や理科などの教科における授業の分析や検証を通して、各教科の授業でどのような言語行為が営まれているかを明らかにする。その上で、国語科における教育内容と対比しながら、他教科の要請にどこまで国語科が応えることが可能か、そして他教科においてどこまで国語教育の観点からの働きかけが可能か、ということについて提案していく。本年度は、

特に算数科における授業の分析を通して、以上の課題を探究するものとする。